

それでは今日はですね、障害のある子どもに寄り添う ICT の現状と課題ということで、しばらくお話をさせていただきたいと思います。よろしく願いをいたします。

まず、障害のある人たちの生きづらさというのが、実はあるわけです。それは社会全体の問題でもあって、本人たちの責任では決してないわけですがけれども、例えばの話、彼らの生きづらさということを考えていただくのに1つモデルといいますか、例を示しますと、例えば、みなさんが突然、言葉もわからない、お金の単位もわからない、習慣も地理もわからない外国に1人でぽつんと放り出されたということを想定していただくと、一体どうしたらいいでしょう。まず、通訳してくれる人、コンダクターがそばにいてくれれば、それはいいわけですがけれども、いつもそういう人がいるとは限らない。というふうに例えば障害のある人たちがいきなり社会に出たとき、あるいは知らない場所に1人で行ったとき、やはりどうしていいかわからないということがあられるわけですね。とりわけコミュニケーションがうまくいかないというのは非常に辛いものがあります。相手の言っていることがわからない。自分が思っていることを伝えられない。そういうことは、まず非常に大きなストレスになると思います。

というときに、多分インターネットにつながったスマホ、あるいはタブレット1枚あれば、ずいぶん助けになると思います。言葉を翻訳してくれるかもしれませんし、自分のいる場所がわかるかもしれません。私は障害児にとっての ICT 機器を、先ほどと同じように身近にあって、何かあったときにちょっと助けてくれると、そういう道具になってくれればいいなと思っています。

そこから押し進めまして、障害のある子どもたち、人たちにとっての ICT 機器の意義というのを考えてみました。大きくは3つあるのではないかと考えています。

1つめは障害による不便や困難を軽減するツールとして役立てていく、ということですね。例をあげて説明しますと、例えば少し前に亡くなりましたけれども、イギリスにホーキング博士という方がいらっしゃいました。この方は重度の障害をお持ちでしたので、車いすに座って、しゃべることもできませんでしたが、ボイスアウトプットコミュニケーションエイドという道具を使いまして、自分の思ったことを言葉にして発していましたので、多くの方がホーキング博士の考えを知ることができ、彼の業績を共有することもできたわけです。つまり、そういう道具立てがなければ、失礼な言い方をしますと、ただ寝てるだけの人というふうに思われたかもしれません。一例ですがけれども、各障害種別それぞれにこういったような支援機器としての役割があると思われます。

2つめには、楽しく効果的に学習できるツール。さまざまな形で ICT を使った教育が行われています。最近ではプログラミング教育といったようなことも小学校から行

われています。ギガスクール構想という言葉をご存じかと思いますが、すべての子どもにタブレット1台を配布できるという体制が整いまして、これは、ろう学校や障害のある子どもたちの学校でも全く同じことですので、今1人1台の環境が実現できたといえるところだと思います。

3つめには、コミュニケーションを支える道具ということで、メールのやりとりだけではなくて、さまざまなコミュニケーションツールとして使える。一方で、後でまたお話と思いますが、それによる危険といいますが、さまざまなことが起こりうるわけですね。顔が見えないコミュニケーションの便利さと怖さと同時にあるということになります。

このように ICT というのはツール、道具なんだというふうに思います。つまり役に立つことが大事であり、もう1つは楽しく使えるということ。何でもそうですけれども、楽しくなければ長続きはしません。ですから ICT 機器というものは、まずは楽しめるツールであってよいと思いますし、それが便利な道具であるということを実感することが必要だと思います。で、必ず使わなきゃいけないのかということになりますと、未来社会は急速にこうテクノロジーが進化していきます。そうなったときに、そこに乗り遅れないためには、必要なスキルの1つになるというふうに思っています。